

様式

地域関連課題等研究支援費に係る研究成果報告（ホームページ用）

	(所 属)	(職 名)	(氏 名)
研究 代表者	京都府立医科大学大学 院 精神機能病態学	講師	土田 英人
研究組織 の体制	府立医科大学 大学院精神機能病態学	講師	土田 英人
	同	講師	西村 伊三男
	同	教授	福居 顯二
	府立大学 公共政策学部 福祉社会学科	准教授	山野 尚美
研究の 名称	京都府北部地域と京都市内における若年者とその保護者の依存性薬物に対する意識と支援上の問題点の比較に関する研究		
研究のキ ーワード	若者の薬物依存、薬物に対する意識調査、地域の支援体制づくり		
研究の 概要	<p>覚醒剤をはじめとする依存性薬物が、低年齢層にも乱用が広がってきている。全国的に、若年者による薬物事犯は増加している。覚せい剤および有機溶剤は近年減少傾向にあるが、大麻は年々増加している。有機溶剤や大麻の事犯の大部分を10代20代の若者が占めている。</p> <p>若者たちは非常に好奇心が旺盛であり、興味本位や仲間外れにされたくないという、とても単純な動機で薬物に手を染める。簡単に入手できる有機溶剤の乱用から、次第に大麻、覚醒剤へと嵌り込んでいく若者が後を絶たない。嶋根らが行った、主な薬物の開始年齢の調査結果を示す。</p>		

	<p>有機溶剤 15.2歳</p> <p>覚せい剤(注射) 20.0歳</p> <p>処方薬 24.5歳</p> <p>11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28</p> <p>たばこ 13.6歳</p> <p>アルコール 14.4歳</p> <p>大麻 19.8歳</p> <p>覚せい剤(あぶり) 22.8歳</p> <p>咳止め 24.6歳</p> <p>図. 各依存性薬物の開始年齢(鳴根卓也, 三砂ちずる. 青少年と薬物乱用・依存. 保健医療科学 54(2):119-126, 2005 より)</p> <p>若者たちが薬物の怖さを知り、彼らの人生の転落を未然に防ぐために、若年者とその家族に対して、地域全体で薬物に関する知識とその危険性について繰り返し啓発していくことが重要となる。以上のことから、今回われわれは、若年者の薬物依存に対する意識を調査し、京都市内と京都府北部地域における医療および社会福祉サポートの課題を比較検討することを目的に研究を企画した。</p>
<p>研究の背景</p>	<p>近年、依存性薬物の種類が多様化するとともに、急速に薬物汚染のすそのが広がり、中・高校生にまで至る低年齢層にも乱用が広がってきており、その低年齢化が大きな社会問題となっている。一般に、若者の覚せい剤や大麻といった薬物問題は、本人の非行性や犯罪性が強調される傾向が強いが、問題の本質は、むしろ本人と家族や友人との「関係性」にあるように見受けられることが多い。若者の薬物乱用・依存症においては、身体・精神症状の管理のみならず、家族を中心とする心理社会的アプローチの重要性を再認識して、薬物の使用を単に個人のモラルの破綻や犯罪としてのみ捉えるのではなく、本人とその家族、さらには地域社会が一体となって協力しながら、一人の若者の社会参加や社会復帰を促していこうとする姿勢が重要となる。</p> <p>こうした背景をうけて、今回われわれは、京都府北部地域と京都市内における若年者の薬物依存に対する意識と医療や社会資源における実際的な要求を検討し、京都府北部地域において不足する医療および社会福祉サポートを明らかにすることで、それらの課題に対処するための具体案を検討することを目的とした。</p>

研究手法	<p>京都府北部地域と京都市内における高校生を対象として、薬物乱用問題に関する認知度、薬物に対する意識に関する無記名のアンケート調査を実施する。また京都府北部地域においてのみ、地域における薬物乱用防止対策等に関する意見・要望や問題点に関して無記名・自由回答でアンケート調査を行う。</p> <p>アンケートの内容に関しては、平成9年6月～7月に総務庁が全国の高校生、保護者、教員を対象に実施した薬物乱用問題に関するアンケート調査を参考に作成することとし、得られたアンケート結果をもとに、京都府北部地域と京都市内における薬物に対する意識と地域における医療機関や社会資源の差異を明らかにし、医療と社会福祉両面からのサポート体制の新たな整備と改善を考察・検討することが本研究の主な目的である。</p>
研究の進捗状況と成果	<p>京都府北部地域と京都市内における高校生とその保護者を対象として、薬物乱用問題に関する認知度、薬物に対する意識に関する無記名のアンケート調査を実施し、また京都府北部地域においてのみ、地域における薬物乱用防止対策等に関する意見・要望や問題点に関して無記名・自由回答でアンケート調査を行うこととした。</p> <p>アンケートの作成にあたって、回答者に不快感を与えないよう質問内容の侵襲性を考慮し、また回収率の向上のために質問の理解と回答の容易さを繰り返し検討して、アンケートを作成した。そして、京都府立医科大学倫理委員会の承認を得ることで、倫理上問題がないことを確認する段階にある。</p>
地域への研究成果の還元状況	<p>若者たちが薬物の怖さを知り、彼らの人生の転落を未然に防ぐために、若年者とその家族に対して、薬物に対する警戒意識や危機意識を高め、地域全体で薬物に関する知識とその危険性について繰り返し啓発していくことの重要性から、若年者やその保護者を対象として薬物乱用・依存防止の講演を行った。</p>
今後の期待	<p>アンケート調査の結果から得られる北部地域における薬物乱用・依存に関する医療や支援の課題や問題点を踏まえて、インターネットやEメールを用いた質問・相談、あるいは適切な医療施設・相談支援施設（少年センターや精神保健福祉総合センター、専門の医療機関あるいは家族教室など）を紹介することで、一層の薬物乱用の防止が期待される。</p>
研究発表	未発表